融合文化研究　第１号　p.4-11　　September　2002

ソローにおける東西文明の融合化の意義
The Significance of the Harmony with Oriental and Western Civilization in Henry Thoreau

山田　正雄
YAMADA Masao

Henry David Thoreau (1817-1862) practiced a simple life. He communed with nature, purifying himself by the shore of Walden Pond. It is clear that his two-year life in the woods is reflective of Hindu philosophy. In this paper, by examining his way of life, I endeavor to clarify why he studied ancient Hindu sacred books, and what he realized through his experience at Walden. Based on the materials I have gathered, I propose that Thoreau's study of Upanishad philosophy brought about two important realizations in him: the significance of harmony with nature and civilization, and of the peaceful coexistence of human beings throughout the world.

『ウォルデン』*Walden, or Life in the Woods*（1854）において、ヘンリー・ソローは理想的人生を追求した。そこには、物質的成功の価値観を棄てて、無為・怠惰を重視する東洋的な認識と経験に基づいた彼の生き方が明示されている。本稿は、ソローが何故に求道的人生を追求したかという観点から、ウパニシャット哲学研究による彼の思想的深化と東西文明の融合化の意義を明らかにしようとするものである。

(1)『ウォルデン』の世界

1845年７月４日から２年２か月２日間に亙るウォルデン池畔での生活報告書『ウォルデン』によると、ソローは自分で建てた小屋に独り住み、農耕と雑多な日雇仕事で生計を立てる生活の簡素化を実践した。それは、自然との親交の傍ら、読書と思索と著述のための余暇を捻出し、ひたすら深く生きて自己探求を目指す生活であった。

『ウォルデン』は全体が18章から構成された自然と人生についての哲学的エッセイであり、その中心テーマは生活の簡素化、自然探求、精神の清浄化である。これらの概念に実

体を与えたものが、エマスン家の書斎から借りてソローが読んだ古代インド聖典、すなわちウパニシャット哲学であることは、「他の僧と同様に、私は自分のテキストに中国及びインド聖典から引き出した文章を書き加え、その後で論文を書いた」[1] と述懐された1851年５月６日の日記の記事が明らかに物語っている。

ソローが1841年から51年に読んだインド文献は、主として『ヴェーダ』、『バガヴァット・ギーター』、『マヌ法典』、『ヴィシュヌ・プラーナ』、『ヴィシュヌ・サルマ』である。これらは紀元前2000年頃の聖典『ヴェーダ』に源流を辿るインド正統派のバラモン思想である。その根本思想はウパニシャット哲学であり、その重要な特徴は精神的内向性にあって、アートマン（自我）の究極的性格に絶大な関心を示すところにある。三枝氏によれば、「宗教の対象であるブラフマン（梵）は、心と生命、生命と物質との場合と同じように、人間と結びつけて考察されている。そこでは、すべての人が天啓をもつことができ、それが直観と呼ばれる。直観は知性とおのずから共存している。人間・人間の魂ないし自我における最高のものは、西洋思想では理性とみなされているが、インド思想ではアートマンであり、アートマンは理性を超えている、と宣言する。合理性は人間において最高のものではなくて、最高のものよりも低い。それは相対的には不死かもしれないが、真に不死なるものはアートマンである。アートマンとブラフマンとが理性を超えているところから、それらは超合理的な直観によって知られる哲学である。」[2] ソローは1840年代にインド聖典を読み耽ってウパニシャット哲学の特質を深く認識した。

(2)物質的成功としての西洋的価値観

ソローは第1章「経済」で19世紀前半の物質文明の興隆期に生きる同時代人の皮相的な在り方を捉えて、労働舞踏病という過剰労働によって人間の機械化に陥った住民の悲惨な生活状況を次のように指摘している。

> 大抵の人は、比較的自由な我国に住みながら、単なる無知と誤解から、余計な心配や重労働に煩わされて、人生の素晴らしい果実を摘み取ることができないでいる。彼らの指は使いすぎて無骨に震え、そのような役には立たないのだ。実際に働き続ける人間は、毎日を誠実に生きる余暇などもたない。それでは労働の市場価値が下落してしまう。機械になる時間しかないのだ。[3]

ソローは人間性喪失あるいは人間性崩壊の社会現象を捉えて、シナ、インド、ペルシア、

ギリシアの古代哲学者のような、外面的に簡素な、内面的に豊かな生き方に言及した。彼は、「哲学者になるということは、ひたすら知恵を愛するが故に、知恵の命ずるところに従って、簡素、独立、寛容、信頼の生活を送ることである。人生の諸問題を理論的にだけでなく、実践的にも解決することである」[4] と主張した。そして、1841年８月６日の日記に「私はインド聖典を読むと必ず精神的に高揚される」[5] と書いたように、ソローはインド哲学を深く学んだため、物質的成功の価値観を棄てて、生活の簡素化の哲学として日常的に実践した結果、「コンコードのどんな住民よりも独立して生きることができた」[6] と公言することができた。

(3)ソローの無為・怠惰と求道的人生

ソローは1842年３月の日記に「私が東方世界へ振り返るとき、休息が一切であると思える。アラビア、ペルシア、インドは瞑想の地である。これら東方の諸国民は、怠惰の贅沢を完璧なものにした」[7] と強い東洋的関心を吐露している。そして、彼は毎日朝夕、ときには一日中、まるで古代インドの修業僧のように、ウォルデンの小屋の玄関先に腰掛けて、瞑想と沐浴を行ない、半日以上の散歩も日課の一部としていた。ソローにとって、無為・怠惰な在り方は、まさにインド哲学の実践であった。それには次のような４つの背景的要因があった。

第１に、ソローは1842年１月に兄ジョンとエマスンの幼い息子ウォルドー、その翌年に学友チャールズ・Ｓ・ホィーラーの死に直面して激しい精神的衝撃と深い悲しみを体験し、兄の追憶のエッセイを著述したいと願うようになった。

第２に、身近な人々の悲劇的な死に直面して、ソローは真剣に深く生きる決意を固めた。1845年７月初旬、「私は人生の事実に直面したい。…我々は常に瞑想し、古代を学ぶ」[8] と書かれた日記は、彼の健康状態を反映していた。事実、彼は大学３年次に肺結核を患い、その後も度々健康を損ない、多くの時間を戸外で過ごすようになった。彼は幼少期に両親から育まれた自然愛・博物学的関心と青年期にエマスンの『自然論』（1836）から精神的影響を受けて超絶主義への関心を抱き、自分の人生を自然と関係づけていった。

第３に、人生のヴィジョンを思い描きながら、1841年から42年にエマスンの蔵書の中からインド聖典『ヴェーダ』、『マヌ法典』、『バガヴァット・ギーター』、『ヴィシュヌ・プラーナ』、『ヴィシュヌ・サルマ』を読んで思索に没頭する機会を得たソローは、インド哲学を実践することによって思想的深化の達成を試みた。ソローの無為・怠惰な生き方は、強い道徳性をもつインド哲学と根強い宗教性を宿したコンコードの精神風土と連関してい

る。従って、彼は1841年８月28日の日記に「『ヴェーダ』はインド人の完全な道徳生活を受け入れている。その場合、誠実ほど真実なものはない。真実は人間の内なる心との関係であって、外部基準とは無関係である」[9] と書いた。

第４に、ソローはエマスンの模倣者ではなく独創的な散文作家になることを目指した。彼が大学時代にエドワード・T・チャニングから受けた道徳的内容のテーマを含む修辞学的訓練には、後年に彼の関心事の伏線となる過剰の商業主義、生活の簡素化、社会慣習などのテーマが含まれていた。[10] 彼はこれらの概念をエマスンの超絶主義の理論すなわち自然解釈、人間の神格化、自己信頼的哲学、創造的人間像と理想的人生といった概念用語と関連づけ､更に自然認識とインド哲学の無為･怠惰な生き方を結びつけて実践することによって内面化を試み、独創的な世界観を実現しようと懸命になっていた頃、エラリー・チャニングから1845年３月に「バラのある野原へ行って自分で小屋を建て、そこで独居生活に専念する壮大な生き方をしてはどうか」[11] という暗示的な手紙を受け取った。それはソローが学友チャールズ・ホイーラーとサンディ池畔の廃れた小屋で無為・怠惰な数日間を過ごした大学4年次の夏期休暇中の体験を想起させただけでなく､ウォルデン池畔における実験生活に霊感を与えた。

(4)ウォルデン池畔における認識と経験

生活の簡素化、精神の清浄化、自然との親交は、ソローの求道的人生における重要な概念である。彼が学生時代に詳述した人生哲学の理念に実体を与えたのは、ウパニシャット哲学と自然である。生活の簡素化は、『ウォルデン』全体を貫く重要なテーマであって、文明社会に在って人生の内面的充実化を目指す哲学である。彼がこの立場から実在を探求するとき、超絶主義と密接な関係にあって、「私は時間と世界である」[12] と日記に書いたように、時間と空間が重要視されている。

精神の清浄化は、第2章「生きた場所と目的」の中心概念である。ソローはウォルデン池をインドの聖なる大河ガンジスに喩えて、自分を取り巻く自然環境が永遠に汚れのない神の宿る場所であり、精神の清浄化に相応しい場所であるとみなしている。彼は「マヌ法典の高尚な文章は、我々を現在のような迷信ではなく、精神の清浄化と自己専心が人々の信仰の場であった時代に連れ戻す。それには現代では見られないほど気高い純粋な専心が伴った洗練された哲学がある」[13] と1841年９月２日の日記に言及した。また、彼は「早朝に起きて池で沐浴した」[14] と語った。更に、また、彼は「インドの哲学者は、続けて述べて

いる。それが置かれた環境によって自分の素性を取り違えてしまい、聖なる師が現われて真相を明らかにするまで、自分が梵天(ブラーマ)であることを悟らないのだ」[15] と人間の神性について説いた。そして、彼は「永遠の時間には、確かに崇高なものがある。だが、時間や場所や機会は、すべて今ここにあるのだ。神自身も今この瞬間、栄光の頂点に達している。…従って、我々は、自分を取り巻く実在の世界を絶えず内部に浸透させ、そこに身を浸すことによってのみ、崇高にして気高いものを理解することができるのである。宇宙はいつでも素直に我々の思索に応えてくれる」[16] と述懐した。そして、「生であろうと死であろうと、我々が求めるものは、実在だけである」[17] と彼が語るとき、精神の清浄化は実在探求に伴う認識である。彼はインド哲学から学んだ認識を1850年５月12日の日記に「人間は純粋、肉体的、精神的、道徳的なチャンネルが開くと、直ちに神へと流れ込む。インド人の美徳に関して言えば、それは精神的な訓練であって、社会的、実際的なものではない。それは認識することであって、実行することではない」[18] と書いた。彼はウパニシャット哲学から無為・怠惰こそが認識の本質であり、精神の清浄化を実行ではなく認識によって達成されることを悟った。

神探求の方法に関して、ソローは1850年５月12日の日記に「神は人が神に思慮深く接近するのを好む。…人が神に接近するのは、忘我によってのみである。…インドの哲学者たちが禁じられたテーマに接近し、彼らの議論に伴う温和と静謐は見事である」[19] と言及した。これはウォルデン池畔での彼の神秘的合一の経験を想起させる。「心地よい夕べだ。全身が一つの感覚器官となり、すべての毛穴から歓びを吸い込んでいる。私は自然の一部となって、不思議な自在さでその中を行き来する。…私は、風にざわめくハンノキやポプラの葉への共感で息が詰まりそうだ。とはいえ、この池に似て、私の平静な心は幾分波立つことはあっても、掻き乱されることはない。」[20]

彼はウパニシャット哲学における神探求について1851年５月１日の日記に詳述した。

> 究極的な解放を獲得する人は、一切の外的行動を節制する。敬虔かつ後悔しているブラフマンを真理に至る知識に導く働きは、すべて内面的、精神的である。それらは光を魂にもたらす日常的な実際の行為ではない。究極的解放を望むモウニは、自己の心を神聖な本質に適合させるため、朝夕に自己の感覚を従わせるように求め、魂の力によって自己をヴィシュヌという永遠の生命に移す。それは、彼の魂が、それらに執着していないからだ。彼は自己が解放されるのを知り、そのとき彼はそれらに対して無関心だけを覚える。リチスは自然と融合し、それが彼らの感覚に不思議なものを残す。明晰かつ聡明な彼らは自己を湿った空気で身を纏うため、もはや存在していな

いように見える。すべての種類の鎖から解縛された大気中の小鳥のように、現世で自由である。このように、ヨギは瞑想に浸り、創造に献身する。彼は聖なる芳香を吸収し、素晴らしい物事を耳にする。[21)]

ウパニシャット哲学における悟りの境地と同様の表現が、第5章「孤独」にも見られる。

我々は思索に耽るとき、健全な意味で我を忘れることができる。頭脳を意識的に働かせることによって、行為と行為の結果から離れて立つことができる。すると善も悪も一切のものが、奔流のように我々の傍らを通り過ぎていく。我々は自然の中にそっくり取り込まれているわけではない。私は流れに漂う流木にもなれるし、空からそれを見下ろすインドラにもなれる。私は劇場の出し物に感動するかもしれないが、その一方で、自分に関係のありそうな現実の出来事には感動しないかもしれない。私は、自分を人間的存在として知っているにすぎない。言わば思考と感情の舞台として。また、私には他人だけでなく自分自身からも離れて立つことができるような、二重の思考様式が存在することも意識している。[22)]

忘我の境地とは、演技者と観客の関係を同時に経験することであると認識されている。1851年５月６日の日記に、彼は「自然との不断の交感と自然現象を沈思黙考することは、道徳的、知的な健康にとって、どれほど重要なことか！学校や仕事の訓練は、そのような平穏を精神に変えることはできない。哲学者は人間的な出来事を、自然現象に対して瞑想するように、大いに距離をおいて沈思黙考する。」[23)] こうして、ソローは瞑想し、自然研究と同時に人間研究に辿り着くことができ、「私が最善の聖典と思うものは、『バガヴァット・ギーター』、『ヴェーダ』、『ヴィシュヌ・プラーナ』、『マヌ法典』である」と日記に書いた。[24)]

（5）東西思想の融合化の意義

ソローはインド聖典に触発されて知的な生き方を探求した。「インド聖典において、人間観はまったく無限かつ崇高である。人間の運命についてこれほど気高い概念はどこにもない」[25)] と感銘を受けた彼は、ウォルデン池畔の自然と調和して孤独、瞑想、無為、怠惰、沐浴、米食を実践して深く生きた。彼が辿り着いた境地は、「私は１つの宗教あるいは哲学を好まない。私はキリスト教と異教の区別のように、ある人間の信仰、あるいは信仰形式などの一時的、部分的かつ幼稚な区別をする偏屈と無知に共感しない。哲学者にとって、

一切の宗派、一切の国民は同一である。私はブラーマ、ハリ、仏陀、大霊が神と同様に好きだ」[26] というものだった。彼はウパニシャット哲学が自分の思想に実体を与え、思想的深化をもたらしたことを悟った。ソローの自然認識に基づいた人間存在についての深い認識は、生活の簡素化と精神の清浄化によって達成された。

最終的に、ソローの東西文明の融合化には、２つの現代的意義がある。第１に、彼が西洋の物質文明の限界を悟って東洋の精神文明に調和を求め、自然と文明の調和の重要性を説くところに現代の我々に自然環境との共生を示唆するという意味で大きな意義がある。第２に、ソローがすべての宗教と民族の同一性を認識したことは、世界人類の平和的共存に一つの道標を示すという意味で大きな意義がある。

NOTES:

本論中のThoreauの*Walden*からの引用は、『森の生活』飯田実訳（岩波文庫）を参考にさせていただいた。

1) Henry Thoreau, *The Writings of Henry David Thoreau,Vol.8, Journal 2*, AMS Press, p.192（以下*WHDT*と略す）
2) Mitsuyoshi Saigusa,『東洋思想と西洋思想』,春秋社, 1969年, pp.79－80
3) *WHDT, Vol.2*, p.6
4) *Ibid,* p.16
5) *WHDT, Vol.7, Journal 1,* p.266, 1841,8,6
6) *WHDT, Vol.2*, p.62　cf.Ibid,p.76「5年間以上も、1年間に6週間の手間仕事だけで生活費を賄え、夏の大部分と冬の全部を研究に当てることができた。」
7) *WHDT, Vol.7, Journal 1*, p.343, 1842,3
8) *WHDT, Vol.7, Journal 1*, p.362
9) *WHDT, Vol.7, Journal 1*, p.276, 1841,8,28
10) Richard Dillman, *Essays of HDT*,19-20
11) *WHDT, Vol.6, Letter*, p.121
12) *WHDT, Vol.7, Journal 1*, p.349
13) *Ibid,* p.280, 1841,9,2
14) *WHDT, Vol.2*, p.98
15) *Ibid,* p.107

16) *Ibid,* p.107-8

17) *Ibid,* pp.109

18) *WHDT, Vol.8, Journal 2,* p.4, 1850,5,12

19) *WHDT, Vol.8, Journal 2,* p.3, 1850,5,12

20) *WHDT, Vol.2,* p.143

31) *WHDT, Vol.8, Journal 2,* p.190, 1851,5,1

32) *WHDT, Vol.2,* pp.149-50

33) *WHDT, Vol.8, Journal 2,* p.193, 1851,5,6

34) *WHDT, Vol.6, Letter,* p.6, 1856,12,12

35) *WHDT, Vol.7, Journal 1,* p.275

36) *WHDT, Journal 2,* p.4,1850,5,12